

嬉泉の新聞

嬉泉新聞／第14号／1989年(平成元年)11月20日発行(年3回発行)

発行所＝福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋1-30-9(〒156)

TEL 03-426-2323

発行人＝石井哲夫

編集人＝友田篤

東京都新庁舎建設現場を

見ながら思うこと

町田 英一

平成3年4月1日オープンをめざして、新しい都庁舎の建設が急ピッチで進められている。第一、第二庁舎と議会議棟を合わせた総延床面積約381,000㎡、収容人員約13,300人、一番大きな第一庁舎は地下3階、地上48階で高さは約243m。この高さは、新宿で一番の新宿センタービル219mを抜くばかりか、日本一高い池袋のサンシャインビルの240mをも抜き去る。総工費は約1450億。このような巨大なマンモス庁舎がやがて新宿に出現するのである。

この新庁舎では、徹底した事務処理のOA化を進め、全庁的なネットワークシステムをめくらせて都政の近代化・効率化を図るという。職員1人々々にIDカードが渡され、事務室入口に設置されたカードゲートに差し込みボタンを押すと鍵があくという、まるでホテル並の印象さえる。

さてこの都民の貴重な財産を、果して障害者や高齢者も豊かに共有できるものなのだろうか。昭和61年4月都知事に提出された「福祉のまちづくり東京懇談会」の最終報告では、福祉のまちづくり推進の焦点の一つに、地域住民の意識の問題が重要であるとして、物心両面にわたる整備の推進をめざすものであることが指摘されている。

新庁舎建設工事に当って、都が、都自ら定めた「街づくり整備指針」にのっとり、移動、施設整備、昇降機等の設備、情報・誘導、外構関係の諸項目についてつぎ合わせを行い、出来る限りの配慮をするということは

当然である。そして、第一庁舎の事実上の最上階に当たる45階にそれこそホテル並の都民も利用できる展望室を設けてくれるのも結構だと思う。そこで、物を考えるも心であるから、やさしさをこめて取り組んで貰いたいものである。都の福祉のまちづくり整備指針作成に専門委員として参加された女性建築家の吉田あこさんも、あるインタビューの中で「ハードを心をこめたハートウェアに」と語っておられた。

東京都は10月3日、福祉のまちづくりのため、公共や民間の施設の入口のスロープ化、ドアの自動化、歩道の点字ブロックの敷設など総合的整備を進めるモデル地区として、中野駅周辺と池袋駅周辺各約100ヘクタールの地域を指定した。今後は両区が中心となって5年間にわたって計画的に整備を進めることになる。是非物心両面にわたってのモデル地区になって貰いたいし、このことには人々の心の障害の垣根をとり払うという気の長いむづかしい課題が含まれていることを忘れて貰いたくない。

折しも10月6日、マスコミは一勢に、今年のノーベル平和賞はチベット解放運動の指導者ダライ・ラマ14世に授与されることが決まったこと、そして同師は常日頃「その人の心に平和が宿っているか否かによって、その人の生き方自体が大きく変わる」と語っていたことを報じていた。

(東京都心身障害者対策協議会会長)

最近、日本社会事業大学の三浦文夫教授から「精神薄弱者の高齢化に伴う問題研究」という東京都からの委託研究に参加しないかという誘いがあった。これには、当然ながら喜んで参加したわけであるが、どのようなことになるか、皆目見当がつかなかった。

最初の研究会で久し振りに東京都福祉局障害福祉部長となった吉田氏に出会った。これは素晴らしいことであった。吉田部長とはかなり以前に東京都の社会福祉審議会の委員であった頃知りあい、その後、東京の子どもの生活研究所に精神薄弱児通園施設の「めばえ学園」を設置するに当って、ちょうど担当課長としてお世話になったといういきさつがあった。この吉田部長のもとで、何らかの新しい東京都の政策に影響を及ぼすと思われる調査研究に参加出来ることは大変意義深いことと思っただけであった。

人間には、いろいろな種類のタイプがあつて、短期間で、うまく知りあえたり、逆に長期間一緒にいても知りあえなかったりするものである。そのような意味では、吉田さんは前者のタイプで、その立場は異なっても、よく話を聴き、理解も早かったようである。

つまり、一般的言い方をすれば、私の話し方が下手なせいと考えていることがうまく伝わらないことが多いようである。そういう意味から言えば、話の通りのよい人でないと一緒に組んで仕事が行きにくいのである。

ただこの研究会がどのような方向ですすむかわからないが、一つは、精神薄弱者が高齢になるということは、親をはじめとした親族と離れる可能性が高くなることや、病気にかかりやすくなるこ

のお世話をしているわけである。その経験を反復検討してみると、コミュニケーション問題の専門化を追求していると考えることが出来るよう。

つまり自閉の人たちは、生活習慣の自立が進んだり、人との会話能力が出来るようになってくると、一見目立たなくなるし、時には好ましくさえ感じられることがある。しかしその逆に不可解な言動も増えてくるのである。こういう臨牀的な経験をうまく他人に伝

施設経営の創造性 (その五)

石井哲夫

とが考えられるのである。

つまり、この問題で考えてみなければならぬことは、社会福祉施設が遠からず、このような高齢化された精神薄弱者問題に、医療との関係を密接に持った介護問題を検討することになるということである。そして我が自閉症関係者は、更に困難な問題に直面しなければならぬのである。

今、我々は袖ヶ浦ひかりの学園において、今や青年期を過ぎて壮年期にさしかかろうとする人たちが

えることが困難となってくることを感じ出し、いささか焦ってしまっている。

世間的には、あまりこのような事実が伝えられず、「いい」か、「わるい」かで区分けしてしまうのであって、個人の内情などは考えてもくれないのである。我々が何気なく使う「社会化」とか「一般化」という言葉も表面的に考えれば、切り捨てとなったり、強制となったりするのであるのか。

自閉の人たちが感じている世界

がドグマであったとしても、まぎれもなく、そこから行動が発生しているのだから、この人たちを健全に社会の中で自立生活を送ることが出来るように援助するには、目標として、この人たちの考えを「社会化」「一般化」していくための治療教育の努力をつづけることと、この人たちを受け入れる社会の側の理解と受容の能力を高めるか、あるいは、その機能を整備していくことになるわけである。とすると、この二つの目標を追求するためには、いずれも、自閉の人たちとかわるための考え方(理解)や方法を明らかにすることが大切なことなのである。その一端を他人に紹介することにも大変な努力が必要なのである。とくに行政の人たちに理解してもらうことにも多くの機会が必要になってくるわけである。我々は行政にとり入れられるような形の説明が出来るように日頃から心がけていなければならないのである。

とすると、行政に吉田さんのような現場経験もち、理解力のある人がいる時に、このようなむずかしい「精神薄弱者の高齢化問題」の解決に一步前進してもらいたいものだと思ふわけである。

ひかりのタイムス

独立第8号

平成元年度上半期

二〇大ニュース

- 1 幼女誘拐事件の犯人逮捕
- 2 美空ひばり死去
- 3 消費税施行
- 4 リクルート事件広がる
- 5 参議院選挙で与野党逆転
- 6 平成改元 昭和天皇崩御
- 7 政治家の女性スキャンダル
- 8 伊東群発地震
- 9 女子高生コンクリート殺人
- 10 首相相次いで更迭
- 11 横山やすし永久追放
- 12 中国天安門の虐殺
- 13 女性 政界に進出
- 14 韓国動乱
- 15 ポーランドで非共産政権成立
- 16 礼宮さま御婚約される
- 17 大葬の礼
- 18 ベトナム難民日本に大量に来る
- 19 NHK会長・民・公委員長交代
- 20 中森明菜自殺未遂

次点

天皇陛下即位後記者会見
太陽神戸三井銀行合併
仙台市政令指定都市になる
(平成になって初めて)
(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

『家事指導の感想』

田中雅也
この平成元年度の四月に、なつてから、川相豊子先生があゆみに入って、家事の指導を受けるのが、毎週、週に、一回と決まりました。
始めは、洗濯もありましたけれど毎週あゆみの部屋の中の机を移動させて、やっているのです。ほかに、少し、木工で、棚作りも、やりました。ガラスの窓ふきも、机のマジック落としてもやりました。
始めの洗濯は一人暮らしの為です。いつも、毎回終了の時は、反省文と感想文も書くようにしています。川相豊子先生が、家事の指

導のパートナーです。

洗濯機は、まだ買っていないので手でもみ洗いをして、いました。毎週、家事の時は、僕と山岸と川相豊子先生と三人で、家事、山岸は、裁縫の役です。僕は、もうこのあゆみの部屋の掃除の習慣は、上手に続けて、できそうです。
(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

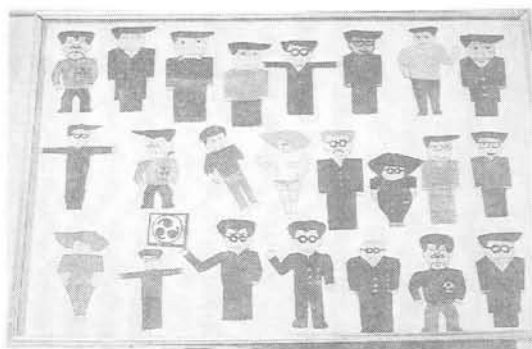
元氣印の女性

ばかりのさばる

山岸 裕

前口上

女性が社会に進出してバリバリ



小山洋次郎君の作品

働きだしてから男社会はガタガタ
又文化面でも女性がイニシアチブ取っている。

これに反比例して、世間は男性に対してダメ男が多すぎるとか、女性たちの批判に迎合して、男性イジメをしている。こういう風潮を私は、いいとは思わない。女性は今まで、同性と群れてきて異性にホッペを打ち明けない、閉鎖性を保ってきた。そのヘンを棚に上げて論じている。

恋愛でワガママを女は言い過ぎ
そのくせ恋愛で女性のワガママな、要求に答えるのが男の資格のごとくいわれている。

男性は女性のコロコロ変わる気分になりまわされて迷惑だ。!!
しかもマスコミまでこれに迎合してる。情けない!!

ワガママなギャルの好みで恋人・結婚が決まるなんて……男性受難の時代だ。

男性が自分の好みで女性を選ぶ事はもう出来ないのか……

女性の要求する無理難題に男性は無理やりあわせなきゃいけないのか、無理難題に答えて内面を磨き、女性のワガママな事にも寛容で、どこか彼女の行きたい場所に連れてってやらなきゃ男性の資格はないという今の御時世はおかし

い???そのくせメディアはこの連中に媚びを売り過ぎる。
有能な女性は目障り

有能なキャリア・ウーマンばかり持て囃されている。これは危険だ!!仕事の世界にも女性が、かっ歩して男性族が小さくみえる。こんな状況じゃ男の存在価値は薄れるばかり。女性の持つ生命力パワーを前にたじろしてしまふ。女性特有のヨコの関係で知恵を出し合い協力する。これは男性にとつて脅威だ!!彼女たちが、男社会の慣行を突き崩す!!台風が吹き荒れている。しかも女性社長・管理職が力をつけてる。こういう状況だから、幼女誘拐事件をおこしたM某のように、アブノーマルな犯罪に走るのだ。女性が大人として精神的にも生活レベルでも、経済的な自立を果たすと男達は萎縮してく。大人の女性と対等につきあえず未熟な幼女に興味をもつようになつてく。

女性の台頭はさまざまにひずみをもたらししている。性的いやがらせすら文句をいっている。男性は、女性をからかいジロジロ女性を見てニヤニヤ楽しむ事も、女性が嫌だからやめてくれ!!という悪しき風潮だ。そんなバカな話があるか!!...こういう事は男性



斉藤成尋君の作品

に、とつてストレス解消になる。それを女性はわかっていない。まったく不自由な世の中だ。窮屈きまりない。能力ある女性の元でつかえる。これは男性にとつて屈辱ではないか。

能力ある女性ほど鼻につくいやみな存在はない。男性にとつて能力ある女性は脅威の存在でしかない。ちつとも可愛くない。

政治に女性が参加しても変わらない。では連中は政治・経済に参加してなんか社会のありようを変えられるか...私は変えられる力はないと断定する。オバタリアン特有

の視野・見方の狭さが災いして政治・経済を台所感覚でとらえて国の進路をあまりかねない。政策能力がなくビジョンのない女性に、国の進路をまかせれば傾国となるであろう。
文化面じゃ女性がイニシアチブをとる

演劇・美術館、どこへいっても、元氣印のオバタリアンばかりだ。この男性不在の家庭で力を蓄えたオバタリアンが居直りのさばる。それは男性にとつて脅威ではない、と私は思う。彼女たちのパワーが男性社会を揺るがしかねない。ウーマン・リブのやからが町に氾濫している広告やグラビアに対してクレームをつけるのは良くない。男性の楽しみを奪う愚行は良くない!!企業だって、そういうイメージ広告を流す事で、男性層にアピールする。立派な販売戦略ではないか!!女性だって広告産業の歯車として働いているクセに文句をたれる。嘆かわしい世紀末の現象だ。反対反対を唱えるのは、共産党だけで充分だ。オバタリアン主導の文化が栄え男性は肩身の狭い思いをしている。男性社会で女性が忍耐していた時代は戻らないのか。幸な事に、日本は女性差別社会。

まだまだ女性には、厳しく冷たい門戸は閉ざされている。女性差別多いに結構な事だ。
結論 単純明快
この連中と共に手をとつて協力する事は現状ではありえない。
(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

〈編集後記〉

編集をやるメディアの人間は苦勞が絶えない。今回から、編集や校正もする事になり、そう思う。原稿や作品はなかなか集まらないし、原稿をこちらで、添削して文章を変えれば、原文の方がいいと言われて、原文どおりにしたり、行を直したり、大変でした。八〇年代最後のひかりのタイムスとなりました。二一世紀までマジックナンバー一〇となった九〇年代に入ります。

さてどんな事が起きるか 大トンドンガエシがあるのか...混沌迷が続くのか?神のみぞ知る展開となるだろう(山岸)



私たちの

うぶや

須藤福祉センター各事業所からの報告

のびろ・ひかりの学園

厨房事情

「おかわりどうぞ」
佐藤 真紀子

今日も、のびろ食堂に工藤由木子さんの明るい声が響き、食堂の一日が始まります。工藤さんはひかりの学園の所属なのですが、毎食食事時間になると、いそいそとのびろにやって来て、お手伝いをしてくれるのです。

施設の食事というと、四角いトレイに冷えた御飯とお味噌汁が一人分ずつ盛られている、というイメージを持たれやすいのですが、のびろ学園の食事は全く違います。石井所長の方針で、より家庭的な食事がとれるように、カウンターサービスという独自の方法をとっているためです。おかわりは自由、又、既定の献立のものが食べられないお子さんのために、職員が必要だと判断した食品は、常備

してあります。

ひかりの食堂の朝食は、もっと進歩的で、ホテルの食事並にバイキング式で、好きなおかずが選択できるようになっています。

又、のびろ・ひかりの厨房では、工藤さんのように、利用者がセッティングやカウンターのお手伝いをしたり、中西幸一君のようにカレーを作ったり、又、皿洗いのお手伝いを飯田真奈子さんがやったりと、自分の好きな仕事ややりたい調理を、保母指導員や調理の職員の援助を得ながら行っていることも特色の一つにあげられると思います。

一般に、福祉施設では、厨房で調理を担当する職員はそれだけに終始し、又、保母指導員は厨房には入らないようですが、のびろとひかりののびろは、保母指導員と調理員が一緒に厨房に入ります。保母指導員は、利用者や園児へのサービスの仕事で、調理員は食事作りを主にやりますが、厨



房に入る利用者たちを受入たり、調理員が保母指導員の補助として、注文を受けたりと、保母指導員の責任の元に一体となって仕事をすすめていきます。若い保母指導員にとっては、逆に賄いの勤務時間が食事や料理を覚える機会にもなります。

職員たちの仕事は、食堂での食事時間以外にも続きます。成人病予防のための特別食作り、規定食を食べられない人のための個別食の準備、あるいは突然おやつが必要になった時対応したり、時間外に食べる病人食の準備をしたりと、利用者や園児の状態によって、日々変化します。

献立を立てる栄養士たちは、利

用者や園児たちの健康、特に成人病予防に気を配りながら、皆の好きなもの、季節感のある目新しいものをと、努力しています。又、現場に立って、食事の様子を見たり、調理の指導にあたったりすることも大切な仕事のひとつです。

現在、食堂の仕事をしている職員は、のびろ・ひかりの共、栄養士・栄養事務担当各一名ずつ、調理員他各三名ずつです。このメンバーでのびろは約八〇食分、ひかりのは約五〇食分の食事を作っています。直接、利用者・園児の中に入ってゆくことはなく、又、地道な仕事ですが、より健康的でおいしい食事が採れるようにとがんばっています。

利用者や園児にとって食事の時間は、学園の生活の中でも大きな楽しみの中のひとつです。昨年の冬、ひかりの学園では、鍋物を囲んでの夕食会を行いました。思いのほか、みなさんお行儀がよく、大変好評でした。又、始めてのにぎり寿司も調理員たちの検討で実行に移せ、皆大喜びでした。このようにこれからの食堂は、目で楽しむ、あるいは行事として楽しむということも考えていきたいと思っています。

(袖ヶ浦ののびろ学園指導員)



グループホームの開設
グループホーム「蔵波台の家」が九月一日からスタートしました。
グループホーム制度は、厚生省が今年新しくはじめた、精神薄弱者の地域生活を援助する事業です。

嬉泉の出来事

従来の通所寮や生活ホームは、社会訓練の場であり、自立した者への住居の提供であったのですが、グループホームは必要最低限のケアを受けながら地域生活を送る拠点と位置づけられています。
ひかりの学園は、これまでも利用者の社会参加に力を入れてきて、機会があれば自閉症者の地域生活を援助したいと考えていました。
今回の制度では、学園がグループホームの運営主体になれること、中西幸一さんのお家からグループホームに最適の住居の提供を受けたことで早速、この事業を開始する申請手続きをし、実現の運びとなりました。
「蔵波台の家」は、長浦駅から徒歩三〇分程度の住宅地の中の二階建一軒家で、働く四名の入居者と世話人が生活します。開設後間もない「蔵波台の家」を暖かく見守り、応援していただきたいと思います。
(島田千夏)

のびろ学園の

大規模修繕

袖ヶ浦ののびろ学園は、その建設から一二年が経ちました。一般住宅でさえ、一〇年を過ぎるといろいろと傷みが目立ってきますが、六〇名の自閉症の子どもと五三名の職員が生活する床面積二四六〇㎡の鉄筋コンクリート造りの建物とその設備の場合、傷みは一般住宅の比ではありません。これまでも、建物や設備が破損したり、故障したりするたびに修繕を随時行ってきました。修繕費の合計が七〇〇万円に達した年度もありました。この額は、同規模の他の施設の二倍以上の出費です。必要なことは行っていました。経費の面から徹底した修理が手当てできず、設備機器をだましました。使ってきたり、暮らした方を工夫したりして凌いできました。が、一二年も経つと、根本的に修理を要するものが累積し、また建物の防水のように経年劣化するものが出てきたり、ここ数年、のびろ学園の建物と設備は深刻な状態にありました。
以前より、袖ヶ浦ののびろ学園の大きな修繕の必要性を東京都福祉局にはご理解を頂いていま

たが、今回、国のご理解をも頂くことができ、大規模修繕補助金を得られることが決まりました。
修繕工事は一〇月より始まっています。完了は一二月末です。のびろ学園のこれまでの継ぎ接ぎを一掃し、最善の生活環境の中で子どもたちへの福祉療育を向上させていきたいと考えています。
(小野直人)

自閉症治療教育

セミナー開催

第六回自閉症治療教育セミナーは去る八月東京お茶の水の総評会館を会場に、三〇〇名の受講生を迎えて開催されました。
このセミナーは、社会福祉法人嬉泉の二〇年にわたる自閉症の治療教育の実践をもとに自閉症の福祉の向上、臨床研究の発展を願い毎夏企画されているものです。

毎回、自閉症の治療教育に関わる分野から多数の講師を迎え、講義、シンポジウム、実践講座など三日間にわたり行われます。
今回は、石井所長はじめ東京大学の村瀬孝雄先生、筑波大学の犬野清志先生、小林重雄先生、東海大学の山崎晃寛先生が講義をされ、治療教育の統合化をめぐるシンポジウムでは豊富な治療教育体験を踏まえて、示唆にとんだお話しが聴かれました。(春原一道)